

アーネスト・サトウ著
「上野地方の古墳群」の学史的位階
英国外交官の考古学探究

Contributions of Ernest Satow's "Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke" to the Development of Archeology in Japan

加部二生

はじめに

- ① アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」
- ② 現地調査から執筆に至るまで
- ③ サトウが調査した古墳・遺物

まとめ

【論文要旨】

幕末から明治期にかけて長く日本に滞在し、多くの日本研究の著書をもつ、英国人外交官アーネスト・サトウは、考古学に関する探究も行っている。その調査のために、サトウは実際に、1880年3月6日から10日までの間に、現在の群馬県前橋市にある大室古墳群を訪れている。その報告は、翌月の日本アジア協会の例会において早くも発表され、紀要としてまとめられている。本書は全編英文による論文で、その後、多くの研究者に引用されているものの、いままでに完全な翻訳は存在しなかった。

彼が訪れた大室古墳群は、その2年前に石室が開口して、多くの遺物を出土した。地元区長等が迅速に対応したために、遺物類の散逸を防ぎ、出土状況の詳細を後世に伝えることができた。サトウの調査は、これらに携わった人物から直接話を聞いて、現地を見学し、同行させた画家に、出土遺物のスケッチを詳細に行わせ、ガラス製小玉やベンガラサンプルを持ち帰って、科学的分析を行っている。また、被葬者の考察を行うに当たり、日本書紀等の文献史料を引用して、いわゆる「大化の薄葬令」から古墳の絶対年代の推定を試みている。当時としては、あまりに斬新過ぎる研究に、日本人研究者は驚きの色を隠せなかったようであり、且つ、多大なる影響を及ぼしている。さらに、古墳被葬者の住まいである居館跡について考察しており、結果的にはその位置については間違っていたものの、付近から近年、豪族居館跡である梅木遺跡が発見され、その想定が実証されている。現代の考古学研究者に最も教訓となることは、文献史料を援用しても、あくまで実年代論については、考古学的成果に委ねるべきと警鐘している。

大室古墳群は近年、史跡整備のために事前調査されて、墳丘規模と墳丘構造の間に相関関係が認められることが明らかになった。こうした何らかの制限が古墳を築造する際に下され、首長層のみに前方後円墳が構築されていたものと推定される。